

《原著》

ビデオフィードバックを用いた母子関係の介入
—ビデオ視聴後の母親の気づき—

近藤 清美

Video-feedback intervention to promote positive mother-child
interaction: Mothers' changes of awareness after video-feedback.

Kiyomi KONDO

Abstract : The intervention to promote positive mother-child interaction is important issue in healthy child development and various programs have been worked out. In this article, one of the programs, Video-feedback Intervention to Promote Positive Parenting and Sensitive Discipline (VIPP-SD), was introduced and showed the results of its intervention. Four mothers participated in the program. The age of their children was 2 to 4 years and half of them are boys and first born. The awareness was especially promoted after video-feedback on positive mother-child interactions and/or positive maternal behaviors. However, not only observations of their own interaction but also some thoughtful comments from the therapist at the video-feedback were found important to promote meaningful awareness. The factor to promote awareness in the VIPP-SD was discussed.

Key words : ビデオフィードバック介入 (video-feedback interaction), 母子関係 (mother-child relationship), アタッチメント (attachment), 気づき (awareness)

はじめに

1. 母子関係への介入技法

ヒトの子どもは、Polzman, A.のいう二次的就巢性の特徴をもち、運動能力が未熟であり、養育者の世話と保護を受けながら、長い時間をかけて大人になっていく。そのため、生まれながらにして社会的相互作用をもつための有能さを備え、養育者と積極的に関わりながら環境への適応を果たす。ヒトの子どもの発達において、社会的相互作用は不可欠であり、Vygotsky, L.の最近接領域の概念は、発達が社会的関係の中でのみ生じ、子ど

もはひとりでは発達しないことを示したものと
して重要である。

発達初期において、子どもが最初に関わる対象は多くの場合、母親である。発達が進むにつれて、子どもが関わる対象の数は増加するが、世話や保護を与える役割の多くは、母親が担う。母親は、子どものアタッチメント対象となることで安心感を与え、子どもが環境を探索するための安全基地となるとともに、環境について学ぶための足場となり、母親との相互作用の中で様々な学習を進める。子どもの発達が母親との関係を通して進むことを考えると、母子の関係性への支援は、発達支援・子育て支援において重要である。

母子関係に介入する技法として、近年、様々な方法が提出されている。たとえば、乳幼児-親心理療法 (Lieberman, Silverman & Pawl, 2000)で

は、目の前にいる子どもと母親の相互作用を扱いながら、自身の過去の親子関係と照らし合わせて母親の子どもへの関わりについて洞察を深める。また、母親が子どもとどのように関わればいいのかのコーチングを受けることで、関係性を変えていく方法も近年、注目されている(Horowitz, et al., 2001)。母子関係への介入について、88個のプログラムを検討したメタ分析において、効果のあるプログラムは、母親の行動に目標をおいた短期間のプログラムであることが分かった(Juffer, Bakermans-Kranenburg, & van IJzendoorn, 2008)。

母子関係に介入する技法での近年の特徴は、ビデオ映像の利用である。たとえば、乳幼児-親心理療法においても、あらかじめ母子の関わりをビデオで撮影し、その映像を元に母親との面接を進めるやり方をとっているものがある(Beebe, 2003)。また、ペアレント・トレーニングにおいても、ビデオ映像を利用して、個々の子どもの行動に応じて、個別に対応を考えて、親子の関係性に介入するプログラムも現れてきた(Phaneuf & McIntyre, 2007)。ビデオ・カメラが軽量化し安価になるに伴い、根拠とする理論は精神分析から応用行動分析まで多様であるが、従来の介入技法に加えて、ビデオ映像をフィードバックすることで介入効果を上げるプログラムは、増加の一途をたどっている。

ビデオフィードバックによって母子関係へ介入したプログラムとして最初に行われたものは、McDonough (1993) の相互作用ガイダンス(Interaction Guidance)と言えるだろう。これは、支援者が家庭訪問を行い、その場で母子の関わりを撮影し、直後に家族みんなで視聴しながら、母子間のうまくいっている関わりを取り上げては賞賛するものである。主として、貧困家庭を対象として行われ、育児へのエンパワーメントを促す役割があった。それとは全く別に独自に発展したものがビデオ相互作用ガイダンス(Video Interaction Guidance:以下VIGと略す)であり、オランダにおいてOrion Projectとして

始められた(Weiner, Kuppermintz & Guttman, 1994)。その後、このプログラムはイギリスに渡り、Treverthen の間主観性理論(Treverthen & Aitken, 2001)に理論的根拠をもつことで発展した(Kennedy, Landor & Todd 2011)。VIGでは、母子間のうまくいっている関わりのビデオ映像を何度も視聴することで、ヒトが生得的にもつ間主観性の能力を活性化して、専門家が特に指摘しなくても、母親自身が母子間の間主観的やりとりで気づくことを重視する。そのことで、母親は子どもの気持ちを理解し、子どもの能力を知ることによって子どもに適切に関われるようになる。

2. アタッチメント理論に基づいた介入技法

アタッチメント研究において、母親の子どもの信号への感性は、子どもに安定したアタッチメントを形成する主要な要因であることが知られている。最近の研究では、子どものアタッチメントに関わる母親の要因として、子どもに対する情緒的利用可能性(emotional availability: Biringer, 2000)や子どもの心への関与(Mind-mindedness: Meins, 1997)、子どもの内面への洞察力(Insightfulness: Koren-Karie, Oppenheim, Dolve, Sher, & Etzion-Carasso 2002)が注目され、Fonagy, Steel, Steel, Moran, & Higgitt (1991)が指摘する内省機能(reflective function)といった母親の子どもの心的状態への関心や受け止めが、安定したアタッチメントには重要ではないかと言われるようになってきた。つまり、子どもの行動から子どもの内面を読み取る力が感性の重要な側面であり、その力を高めることが子どもに安定したアタッチメントをもたらす鍵と言えるわけである。

こうした理論にそって、アタッチメント理論に基づく母子関係への介入技法は、近年になって急速に発展してきた。そもそも、ホスピタリズムを初めとして、アタッチメント障害に関する研究の歴史は長い。アタッチメント理論の発展は、それとは別に、主として、中産階級の母子を対象にした発達心理学研究の中で行われてきた。臨床的

介入では、虐待やネグレクトといった過酷な状況でのアタッチメント障害に努力が払われてきたが、最新のアタッチメント研究の成果が取り入れられることがなかった。両者の歩み寄りが進んだのは、Main & Solomon (1990)が、未組織／無方向型アタッチメント・パターン、いわゆるDタイプを見いだしたことによる。Dタイプのアタッチメントは、アタッチメント関係がひどくゆがんだ状態であるとして臨床的に注目され、アタッチメント理論に基づく介入技法がいくつも開発されることになった。

アタッチメント理論に基づく介入技法として、理論的に明確で広く行われているものは、Circle of Security（以下COSと略す：Marvin, Cooper, Hoffman & Powell, 2002）とVideo Interaction to Promote Positive Interaction(以下ビデオ育児支援法とする：VIPP：Juffer et al., 2008)である。

COSは、子どもが母親に示す間違ったアタッチメントに関する信号の出し方と、母親のアタッチメントに関する信号の間違ったとらえ方が、アタッチメントの問題をもたらすと考え、ストレンジシチュエーション法などを用いて母子のアタッチメント関係のアセスメントを丁寧に行う。問題をもたらす特徴的な母親の行動や考え方を「リンチピン＝車軸」と捉えて介入を行う。介入では、親子の遊びやストレンジシチュエーション法での行動を撮影したビデオ映像のビデオ・クリップを用い、母子でうまくやっている場面とともに、「リンチピン」を示す問題の場面を4つ程度、提示する。各ビデオ・クリップは、3分程度のものであり、途中で止めたり繰り返し見せたりして、母親に子どもの行動のとらえ方や関わり方について洞察を進めてもらう。COSの特徴は、原則として、5、6人の集団療法として行われることであり、対象者は他の母子の映像を見ることができるとともに、介入対象となっている母親を情緒的に支え、一緒に考える仲間として振る舞うことになる。毎回、一人ずつ、介入の対象者となり、合計20回程度の介入回数となる。介入の流れは以下の通りである。

- 1 - 2週目：導入と理論学習
- 3 - 8週目：テープレビュー（一人ずつ）
- 9週目：移行期：防衛機制に関する学習
- 10 - 15週目：テープレビュー（一人ずつ）
- 16週目：これまでのまとめ
- 17 - 19週目：テープレビュー；変化の確認
- 20週目：卒業式

COSの対象者は、比較的病理が重い母親であり、乳幼児一親心理療法と同様に過去の母子関係との関連を考えさせたり、自身の内面を洞察するといった精神分析的な手法が使われる傾向があり、実際の介入には支援者の力量が求められる。しかしながら、母子関係の問題点をアタッチメント理論に基づいて丁寧にアセスメントする点は、他の介入技法にはない優れた点であると言えるだろう。

3. ビデオ育児支援法 (VIPP)

アタッチメント理論に基づくもう一つの介入技法が、ビデオ育児支援法である。これは、オランダのライデン大学の研究者によって開発された。その特徴は、介入プロトコルが明確であり、効果研究が適切に行われている点にある。

ビデオ育児支援法は家庭訪問によって行われ、毎回、ビデオ撮影をして、その映像を元に介入が行われる。介入は4回で終了し、その後、2回はブースター・セッションである。毎回、アタッチメント理論に関することがテーマとなり、その内容は表1の通りである。介入は、撮影された映像を取捨選択して見せることでの対象者に生じる憶測や疑念を避けるため、撮影された全映像が対象者に提示される。その点で、VIGやCOSを初めとする多くのビデオフィードバックによる技法がビデオ・クリップを用いて行うのとは対照的である。

ビデオ育児支援法には、子どもの年齢やニーズに合わせて3つのバージョンがある。オリジナルのバージョンは、アタッチメントに関するテーマだけを扱うものである。子どもの年齢が2歳以上で、子どものしつけが親の主な関心事である場合

には、オリジナル・バージョンに、しつけ方略を加えたVIPP-SD (Sensitive Discipline) が行われる。VIPP-SDでは、敏感なしつけ (Sensitive Discipline)の部分において社会学習理論が用いられ、表1に示したようにほめ方やタイムアウトなど、ペアレント・トレーニングと同様のテーマが扱われる。さらに、三つ目のバージョンとして、VIPP-Rがある。これは、親の内的作業モデルにアプローチすることでアタッチメントの問題に対応することを目指すものであり、オリジナル・バージョンのVIPPを行った後で、表1に示すようなテーマで、現在の子どもに対する親子関係と自身の原家族での親子関係を対比させて考えることで洞察を得る。この3つのどれを適用するのかは、対象者にあわせることになるが、現在、最も広く行われ、効果が確認されているのがVIPP-SDである。本稿において、VIPP-SDを「ビデオ育児支援法」の代表として紹介することにする。以下において、ビデオ育児支援法と表記しているものは、すべてVIPP-SDのことである。

毎回の介入では、初めに次の回で用いられる映像の撮影が行われる。撮影の場面は、次の介入

のテーマにふさわしいものであり、使用する玩具や設定はあらかじめ決められている。ビデオの撮影後、前回撮影したビデオを対象者と一緒に視聴する。ビデオの視聴では、最低でも30秒～1分ごとに何らかのコメントをすることが推奨されている。その際なされるコメントについて、あらかじめビデオを詳細に視聴して、介入のための台本を作成することになっている。コメントの内容としては以下の5種類がある。1) 子どもの行動の解説、とりわけ、子どもの発達的な特徴が現れているときに、そのことを取り上げて説明する。2) ポジティブな母子相互作用を取り上げ、どこがすばらしいのかを説明して賞賛する。3) 母親のうまい関わりを取り上げ、どこがすばらしいかを説明して賞賛する。4) ビデオを止めたり、何度か見直して、当該の場面で子どもが何をしようとしているのか、どう思っているかを一緒に話し合う。このやり方は、代弁をテーマとする2回目以降の介入から用いられる。5) 「修正メッセージ」として、うまくいっていない関わりを取り上げ、どのように関わればよかったのか、子どもがなぜこういう行動をしてしまうのかを話し合い、その回

表1 ビデオ育児支援法でのテーマ

	V I P P	V I P P - S D	V I P P - R
1回目	探索対アタッチメント	誘導と気そらし	分離：過去と現在
2回目	子どもの代弁	正の強化	養育：過去と現在
3回目	敏感性の連鎖	敏感なタイムアウト	大人間の関係
4回目	気持の共有	子どもへの共感	親の子どもとして： 過去と現在

表2 介入のためのコメントの内容

対象者	子ども行動	母子相互	母親関わり	子ども気持	修正	合計
A	23(19.7)	36(30.7)	35(29.9)	12(10.3)	11(9.4)	117
B	26(27.4)	33(34.7)	9(9.5)	18(18.9)	9(9.5)	95
C	8(8.4)	41(43.2)	29(30.5)	10(10.5)	7(7.4)	95
D	12(11.0)	38(34.9)	31(28.4)	18(16.5)	10(9.2)	109

数字は回数、括弧中は合計頻度に対するパーセント

子ども行動＝子どもの行動の解説、母子相互＝ポジティブな母子相互作用

母親関わり＝母親のうまい関わり、子ども気持＝子どもの気持ち、修正＝修正メッセージ

の介入のテーマであるアタッチメントやしつけについて学んでもらう。「修正メッセージ」は、原則として関係ができる3回目以降の介入から用いられる。ビデオ育児支援法では、どの対象者にも話す共通の内容が決まっているため、それも台本に入れておき、初めから終わりまでの台本を作成してから、介入に臨むことになる。最初の1, 2回では、主に子どもの行動について取り上げ、関係ができてくる3回目以降に母親の行動を取り上げるようにする。

ビデオ育児支援法の効果は、無作為統制群を用いて検証され、母親の感性を有意に高めることがわかっている(Velderman, Bakermans-Kranenburg, Juffer & van IJzendoorn, 2006)。また、未組織／無方向型アタッチメントを安定したものに変える効果も認められている(Bakermans-Kranenburg, van IJzendoorn, & Juffer, 2005)。その他、イタリアやイギリスにおいて、低出生体重児や摂食障害の母親に対してビデオ育児支援法の効果研究が行われ、知見が蓄積されつつある。

本稿では、我が国で初めてビデオ育児支援法を行った結果を報告する。特に、ビデオの視聴に対して、対象者がどういった場面で気づきを得るのかを明らかにすることで、ビデオ育児支援法のどのような要素が重要であるのかを追究する。なお、著者は2008年、ライデン大学においてビデオ育児支援法の講習会を受けている。

方法

対象者

対象者は幼稚園で配布された介入研究の募集に応じて参加した4名であった。プライバシーを守るため、本稿では結果の解釈に必要な情報のみを提示する。母親の年齢は、20歳代後半から40歳代前半であった。教育歴は14年から16年であり、比較的教育レベルが高い方であった。子どもの年齢は2歳から4歳で、その半数が第一子で、男女は半々であった。どの子どもも満期産で生まれ、周

産期に大きな問題はなく、発達過程も順調であった。

手続き

介入は、すべてビデオ育児支援法のマニュアルに従って行われた。介入は4回行われ、ブースターセッションは省略された。介入の間隔はほぼ1ヶ月おきであったが、正月や冬休みをはさんだ時には、それ以上に伸びることがあった。支援者は、対象者と一緒にビデオ映像を見ながら、時々、一時停止をしたり、同じ場面の再生を繰り返したりしながら、膝においた台本を参照しながら介入を進めた。介入に際し、各回に共通して説明する内容や、追加的説明について、A4版で1～2枚のハンドアウトを作成し、対象者に渡した。

毎回の介入後、支援者は直ちに支援結果をログブックとして詳細に記録した。本研究の分析は、この記録をもとに行われた。

結果

1. 介入のためのコメントの内容

介入のためのコメントの内容を1) 子どもの行動の解説、2) ポジティブな母子相互作用3) 母親のうまい関わり、4) 子どもの気持ち、5) 「修正メッセージ」にわけて頻度を数えた(表2)。その結果、総コメント数に対象者による大きな差異はなく、4回の介入で合計100回前後のコメントがなされた。対象者によっては、子どもの行動の解説や母親のうまい関わりに関するコメントが少ないものもあるが、ほぼ共通するのは、ポジティブな母子相互作用と母親のうまい関わりが、それぞれほぼ3割程度、子どもの気持ちを考えさせる関わりが1割少し、「修正メッセージ」は1割弱であった。ビデオ育児支援法の介入では、母親の関わりを考えさせたり、修正することよりも、うまくできているところを取り上げて指摘することが多くの部分をしめていると言える。

2. ビデオ視聴後の母親の気づき

表3 母親の気づき

対象者	自発	子ども行動	母子相互	母親関わり	子ども気持	修正	合計
A	14	3(13.0)	8(22.2)	8(5.7)	2(16.7)	8(72.7)	37
B	2	5(19.2)	13(39.4)	2(22.2)	2(11.1)	2(22.2)	26
C	0	0(0.0)	10(24.3)	1(3.4)	3(30.0)	4(57.1)	18
D	1	3(16.7)	6(15.8)	9(29.0)	4(22.2)	6(60.0)	28

数字は回数、括弧中はコメント数に対するパーセント

子ども行動=子どもの行動の解説、母子相互=ポジティブな母子相互作用

母親関わり=母親のうまい関わり、子ども気持=子どもの気持ち、修正=修正メッセージ

母親がビデオ映像から自発的に気づいたことを発言する場合と、支援者が介入のためのコメントを述べた後でわかったことや新たに発見したことを述べたり、コメント内容に大きく頷いた場合を気づきとした。また、「修正メッセージ」については、支援者の説明に納得の発言をしたり頷くだけでなく、自らの意見を述べて見方を明らかにしたり、そこから派生して日常場面でのエピソードを取り上げた場合も気づきとした。支援者が介入のためのコメントをしても単に聞いているだけだったり、そういう見方は当てはまらないと否定した場合は、気づきとは見なさなかった。その結果、対象者は平均28.8回（18回から43回）の気づきに関する発言を行った（表3）。ビデオの映像から自発的に気づきの発言を多くした対象者もいたが、多くの場合、ポジティブな相互作用や母親のうまい関わりのコメントを受けて気づきの発言をすることが多かった。

具体的な発言としては、子どもの行動の解説で「何気なくやっていることだけど、そういう意味があるんですね。」といったものや、母親のうまい関わりで「親からしつけが厳しすぎると言われてきたのですが、こういう関わりでよかったんですね。」とか、子どもの気持ちを考えさせた後、「すぐにダメダメと言ってしまうですね。ダメダメというと、つまらなそうな顔になってしまうんですね。かわいそうなことをしてしまったですね。」といったものであった。また、「こうやってビデオを見てみると、本当に子どもを褒めてないですね。」といった、ビデオ映像から自発的に発見を

述べることもあった。

気づきに関するコメントを子どもに関するものと母親自身に関するものとで整理すると（表4）、対象者によっては子どもに関するものが多い場合があったが、ほとんどの場合、両者に差がなかつ

表4 気づきの内容

対象者	子どもに関して	自身に関して
A	20	17
B	15	8
C	9	9
D	14	17

た。子どもの特性や気持ちについて発見するだけでなく、自身の関わり方の特徴や問題点に気づかれることも多かったと言える。

介入のための各コメントに対する気づきの割合を示してみると（表3）、個人差はあるものの、ポジティブな母子相互作用に対してはコメントの2、3割で気づきが得られたようである。対象者によっては、母親のうまい関わりを指摘されたときや子どもの気持ちを考えさせられたときに気づきが得られた。「修正メッセージ」に対する反応は、ほとんどの対象者で肯定的で、単に納得して受け入れるだけでなく、それまでとってきた育児方略と対比させて考えたり、どうしてそうした行動をとってしまうのかを内省することにもつながった。

3. ビデオ視聴による影響

一人を除いて、対象者は、ビデオを視聴することで、いろいろな発見があり、ためになるとおっ

しゃった。また、自分の子どものほほえましい情景に引き込まれて、映像を見ることそのものを楽しんでいる方もいた。対象者によっては、映像内容から派生して、子どもの日常での行動について疑問に思っていることを尋ねてきたり、育児について相談してくることもあった。さらに、ハンドアウトを夫にも読ませ、ビデオから学んだことを夫婦で話し合った対象者もいた。

実際の母子間の行動では、2回目以降、ビデオ育児支援法の毎回のテーマから学んで、子どもへの対応を変えた母親がほとんどであった。特に、褒めることは、どの母親も気をつけていた。また、子どもの気持ちを代弁しながら関わるようになった母親もいた。さらに、タイムアウトの話をした後は、早速、使ってみたようである。回数を重ねるに従って、ビデオ視聴時に少し指摘するだけで、ビデオ映像から子どもの気持ちを読み取り、子どもの気持ちに関するコメントをしても、スムーズに進めることができた。

しかしながら、ビデオ視聴に対する反応には個人差が大きいことも確かであった。コメントに対してほとんど発言しなかったり、そういうことは自分には当てはならないといった感じで聞き流す対象者がいる一方で、ビデオを視聴するだけで自ら様々な発見をして発言をする方までいた。ただし、支援者の映像に関するコメントには拒否的とも言える態度をとる対象者であっても、映像を見ることや、育児に関する知識を得ることには熱心であり、毎回、配布する支援内容のレジュメを熱心に読んだり、それについての質問があった。

考察

対象者は少数であるが、ビデオを視聴することで得るものがあると評価していることでは共通している。介入の際、うまい母子間の相互作用や母親の関わりが見られた場面で支援者はコメントを行うことが多く、対象者が気づきを得られる場面もそうした場面であった。初期の相互作用ガイダンスを含めて、ビデオフィードバックによる母子

関係調節技法では、まず最初にポジティブな映像をとりあげる点で共通している。ビデオフィードバックが効果をもたらす要件として、ポジティブな側面を取り上げることをあげることができる。そのことで、対象者は「こういう関わりでよかったのだ」という安心感につながり、映像に見られるほほえましい子どもの様子から、子どもの気持ちになり込むこともたやすくなる。また、介入により非難されるのではないかと防衛的になりがちな対象者と信頼関係を築くことにもつながる。

一方、「修正メッセージ」は指示的な技法である。本研究の結果では、多くの場合、「修正メッセージ」は対象者に気づきをもたらし、育児に関する発見をもたらした。VIGのように、対象者にうまい関わり方のビデオ・クリップを提示するだけの非指示的な技法に対して、ビデオ育児支援法は、毎回の介入テーマが明確であり、「修正メッセージ」によって具体的に問題点を指摘するなど、かなり指示的である。それでも、対象者を傷つけたり防衛的にすることなくメッセージが伝わるのは、介入がステップを追って進められているためと言えるだろう。実際に、介入の初期には、子どもの行動の解説やポジティブな母子相互作用への言及が中心となり、「修正メッセージ」を伝えるのは3回目以降に見られた。

ビデオフィードバックを用いた母子関係の介入技法の中には、ビデオ映像を支援者と一緒に視聴するだけのものもあるが、本研究において、ビデオから自発的に気づきを深めることができた対象者はわずかであった。単にビデオを見るだけでは気づきにはつながらないと言える。そのため、ビデオ育児支援法では、支援者のコメントが重要となる。また、ビデオ・クリップを用いた技法では、どの場面を選んだかと言うことそのものがメッセージ性を持ち、そのことで介入効果を上げると言える。ビデオフィードバックにおいては、対象者にビデオをどのように見せるかが重要であり、ビデオ映像を単に見せるだけでは、何ら効果をあげないであろう。

ビデオ育児支援法が終始、重視しているのは、子どもの気持ちを代弁し、子どもに「成り込みながら」ビデオ映像を視聴することである。特に、2回目に介入のテーマとして代弁が取り上げられた後には、支援者も子どもの気持ちを代弁して伝え、母親にもそれを考えさせるコメントを多くする。母親がビデオ映像から気づきを得るのは、子どもにも子どものつもりがあることを発見したり、子どものつもりを無視して関わる自身の姿を認めたときである。つまり、最近のアタッチメント研究で重視されている敏感性の重要な要素である子どもの内面を読み取る力に焦点を当てて介入を行い、それが効果をあげていると言える。敏感性を高めると言っても、単に、子どもの行動上の信号に随伴的に反応することを目指していない点に注目したい。また、ビデオ育児支援法では、一見、ペアレント・トレーニングと同様のテーマを扱い同じ技法を教えるが、その場合も、子どものつもりを理解して、それに共感を寄せた上で、しつけ方略をとることを強調している。たとえば、禁止する際にも、子どもは何がしたいのかを把握して代弁した上で実行するように言う。このように、ビデオ育児支援法では、子どもの内面に思いをはせ、それを的確につかむことを支援することで、敏感性を高めているわけである。子どもと間主観的に関わることを強調するのは、VIGを初めとして、多くのビデオフィードバックによる母子関係調節技法に共通する要素である。それらはすべて調和的な母子関係を目指すとはいえ、アタッチメントの問題に介入するには、それに加えてどの要素が必要であるのか、あるいは、ビデオ育児支援法が他の技法と異なってアタッチメントの問題に効果があると言えるのはどの点なのか、今後追究すべき課題である。

本研究は対象者も少なく、予備的研究の範囲をでるものではない。今後、対象者の数を増やし、介入前後の変化をしらべることで、ビデオ育児支援法の効果やそのメカニズムについて、さらに考察を進める予定である。

本研究は、文部科学省科学研究費（平成21年度

～平成24年度基盤研究C、課題番号21530737）の助成を受けた。本研究に参加したいただいた母子に心から感謝いたします。

引用文献

- Bakermans-Kranenburg, M., van IJzendoorn, M. & Juffer, F. 2005 Disorganized infant attachment and preventive interventions: A review and meta-analysis. *Infant Mental Health Journal*, 26, 191-216.
- Beebe, B. 2003 Brief mother-infant treatment using psychoanalytically informed video microanalysis. *Infant Mental Health Journal*, 24, 24-52.
- Biringen, Z. 2000 Emotional availability: Conceptualization and research findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, 60, 104-114.
- Fonagy, P., Steel, M., Steel, H., Moran, G. S. & Higgitt, A. C. 1991 The capacity for understanding mental states: The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 12, 201-218.
- Juffer, F., Bakermans-Kranenburg, M. van IJzendoorn, M. 2008 Promoting positive parenting: An attachment based intervention. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Horowitz, J. A. Bell, M., Trybulski, J., Munro, B. H., Moser, D., Hartz, S. A., McCordic, H. L. & Sokol, E. S. 2001 Promoting responsive between mothers with depressive symptoms and their infants. *Journal of Nursing Scholarship*, 33, 323-329.
- Kennedy, H., Landor, M. & Todd, L. 2011 Video Interaction Guidance: A Relationship-Based Intervention to Promote Attunement, Empathy and Wellbeing. Jessica Kingsley

- Pub.
- Koren-Karie, N., Oppenheim, D., Dolve, S., Sher, E. & Etzion-Carasso, A. 2002 Mothers' insightfulness regarding their infants' internal experience; Relations with maternal sensitivity and infant attachment. *Developmental Psychology*, 38, 534-542.
- Lieberman, A. F., Silverman, R. & Pawl, J. H. 2000 Infant-parent psychotherapy: Core concepts and current approaches. In C. H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health*. New York: Guilford Press. 472-485.
- Main, M. & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & M. Cummings (Eds.) *Attachment in the preschool years: Theory, research, and intervention*. 121-160, Chicago: University of Chicago Press.
- Marvin, R. Cooper, G., Hoffman, K. & Powell, B. 2002 The circle of security project: Attachment-based intervention with caregiver-pre-school child dyads. *Attachment and Human development*, 4, 107-124.
- McDonough. 1993 Interaction guidance. In C. H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health*. Guilford Press; New York. 414-426.
- Meins, E. 1997 *Security of attachment and the development of cognition*. East Sussex: Psychology press.
- Phaneuf, L. & McIntyre, L. L. 2007 Effects of individualized video feedback combined with group parent training on inappropriate maternal behavior. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 40, 737-741.
- Trevarthen, C. & Aitken, K. J. 2001 Infant intersubjectivity: Research, Theory, and clinical applications. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 42, 2-48.
- Velderman, M. K., Bakermans-Kranenburg, M. J., Juffer, F. & van IJzendoorn, M. 2006 Effects of attachment-based interventions on maternal sensitivity and infant attachment: Differential susceptibility of highly reactive infants. *Journal of Family Psychology*, 20, 266-274.
- Weiner, A. Kuppermintz, H. & Guttman, D. 1994 Video-home training (The Orion Project): A short-term preventive and treatment intervention for families with young children. *Family Process*, 33, 441-453.